主は私の羊飼い。私は乏しいことがありません

高橋　勇



妻の一枝さんと

私は一九四九年、岩手県の山合いの小さな寒村で生まれました。二人の姉は既に社会人で別の所で暮らしていましたので兄、私、弟が三人兄弟のように育ちました。母は三十代よりリューマチを患い、入院治療とか温泉湯治のために不在が多く、淋しい思いをしたものです。実家は農家でしたが働き手不足でしたので田畑の耕作、草取り、収穫、乳牛の世話などの手伝い、冬期には父の炭焼の手伝いもあり、寒い雪の中での作業は厳しく辛いものがありました。実家は先祖崇拝でしたが生活の苛酷さの中で、私は子ども心にも「神様助けて」と願わずにはおれませんでした。

こうして、主は彼らの救い主になられた。彼らが苦しむときには、いつも主も苦しみ、ご自身の使いが彼らを救った。その愛とあわれみによって主は彼らを贖い、昔からずっと、彼らを背負い、抱いて来られた。

（イザヤ　63・8〜9）

私は盛岡の高校を出て後、大学で学ぼうと上京することになりました。私は歌が好きでしたのでサークルに混声合唱団を選びました。入学はしたものの当時は大学紛争のまっただ中でバリケード封鎖とかロックアウトとかで休講続きでしたので、私は合唱団活動に生き甲斐を求め、のめり込んで行きました。

一九七一年、大学四年の春、宮崎出身の山本一枝さんが合唱団に入部してきて、私たちの出会いとなりました。

卒業後一年ほどして、彼女から相談したいことがあるとのことで私たちの再会となりました。彼女は大学を休学して声楽を勉強したいとのこと。私は賛成し励まし、それ以来私たちは時々会うことになりました。そのうちに彼女がクリスチャンだということが分かり、私は神田の古本屋街で内村鑑三全集を入手し、彼女にプレゼントしたことがありました。

私はその頃、キリスト信仰の明確な知識はありませんでしたが、キリスト教が歴史、文学、芸術に大きな影響を与えてきた事実に触れてはおりました。それで自分も同じ信仰を持てたらというあこがれを抱いておりました。

一九七六年、神様の不思議な導きにより、さまざまの紆余曲折を経て私たちは結婚することになりました。

ふたりはひとりよりもまさっている。ふたりが労苦すれば、良い報いがあるからだ。どちらかが倒れるとき、ひとりがその仲間を起こす。倒れても起こす者のいないひとりぼっちの人はかわいそうだ。

もしひとりなら、打ち負かされても、ふたりなら立ち向かえる。三つ撚りの糸は簡単には切れない。

（伝道者　4・9〜10、12）

一九七七年夏、英語学校を卒業した私は一足先に帰

6人の証し

省した妻からの提案を受け入れ、小林で英語塾を始めることに決めました。妻の実家は長年、珠算塾を営んで多数の子どもたちが習っていました。その一部屋を借りて仕事を始めたのです。

日曜日には、妻の父や母と私たち夫婦四人揃って近所の日本キリスト教団の小林教会に行くことになりました。当時の教会は幼稚園舎、牧師館、教会堂と次々に建設工事が行なわれ、活気に満ちておりました。神様の祝福のみわざを目のあたりにして私は自然にお交わりの中に入らせていただきました。そして不思議にもイエス様をよく知らないうちに日曜学校のお手伝いをすることとなりました。今考えてみますと、このようにして主が一歩一歩イエス様に近づくように導びかれ、聖書を学んでイエス様を知り、イエス様を受け入れるようにご計画のままに働いてくださったと思うのです。

私たち夫婦は子どもが大好きですが、長女の祈子が与えられたのは結婚五年後の事でした。妻は妹の子どもを見てはいつも彼らが帰った後で自分の子のいない淋しさに涙しておりました。イエス様は私たちの願いを聞いて答えてくださいました。妻の卵巣の一つが嚢腫になっていることが分かり、これを手術で摘出し、残りの一つを治療することになりました。この結果、待望の長女の誕生となったのです。何と片方の卵巣だけで長男の勇一郎、次男の芳也、次女の真理子、三男の慶と次々に五人の子どもたちを授かったのです。イエス様は私たち夫婦を豊かに祝福してくださいました。

わたしを呼べ。そうすれば、わたしは、あなたに答え、あなたの知らない、理解を越えた大いなる事を、あなたに告げよう。（エレミヤ　33・3）

一九八五年頃からの教会生活は暗闇でした。教会学校と教会役員の重荷に苦しんでおりました。イエス様を捜してもイエス様は見えず、喜びのない教会生活の

中で教会に来なければよかったと思うほどでした。牧師のいない所で交わってはいけないなど、牧師が教会員に種々の禁止事項を強制するのでした。

ある時、私は牧師に呼ばれました。そして三十分以上一つ一つ項目をあげられ、責められたのです。私は失望しました。しかし教会とはどこも同じようなものだろうと諦めながら教会生活を続けておりました。

一九九〇年夏のことでした。三男の慶が生まれてひと月経ったころ、上野セツさんに赤ちゃんを見せようとして訪ねたのです。彼女はベックさんという人に会ったと言って喜んでおりました。集会の皆さんがご自身の体験をつづった証し集「光よあれ」やメッセージテープをたくさん私に渡して勧めてくれました。それらの本やテープを持ち帰ると、妻は早速読んだり聴いたりしておりました。私は教会にすっかり失望しておりましたので、家事をしながら聴く妻のところを素通りしておりました。ところがある時、アルコール中毒から救われた四国の方の証しを聴いて驚き、テープルについて座って静かに聴いたのです。次のような内容でした。『アルコール中毒で入院中、誰かの運転で集会に行きベックさんに会った。神様、イエス様のことをベックさんから聞いてうれしくなった。その方は病院に帰るとその日のうちに医者から退院して良いと言われた』と、生きて働かれる神様のみわざが喜びのうちに証しされており驚きました。「イエス様は生きておられ、すごいことをなさる」とうれしくなりました。それから「光よあれ」とメッセージ三昧の日々となりました。キリスト集会は、牧師制度も献金制度も組織も会員制度のような人間的なものを一切排除し、純粋に聖書のみことばに立ち、主だけを中心にする集いであると知り、すぐに教会に退会の手紙を書き、宮崎キリスト集会に集い始めました。

求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。

6人の証し

そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。（マタイ　7・7）

祈子（のりこ）は受験高に進学したのですが、一年生の秋ごろから全く勉強をしなくなり、そのうちに登校できなくなりました。私たち親は、課題に取り組めないで逃避している娘がまったく理解できず、お手上げ状態になりました。私たちには努力すれば何とかなる、そうしないのは娘が怠惰（たいだ）だからと思われました。そのため私は強制的に学校に連れて行こうと実力行使に出たのです。それに対して娘は私にカバンを投げつけ「死んでやる」と言いました。その時、私は心の中で「こんな心配をかける娘はいらない。いないほうが良かった」と思ったのです。次の瞬間、イエス様は私の心に光を送って教えてくださいました。「ということは、死んでしまえということだ。不登校に苦しむ娘に何という愛のない親だ」と。私は自分を良き人、優しい夫、子どもの良き理解者だと思っておりました。

イエス様は十字架上で「父よ。彼らをお赦（ゆる）しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです」（ルカ23・34）と、とりなしてくださっていますが、私自身も何をしているのか、何を言っているのか分からない者だと知らされました。「義人はいない。ひとりもいない」（ローマ3・10）というみことばを読みながら、しかし自分は義人だと自分の罪を認めたくない者であり、自分は正しいと言い張る者でした。ですからイエス様の十字架が私の罪の贖（あがな）いのためであったと心から受け入れられていなかったのです。しかしこの時、私は自分の罪を心から認め、悔い改めることができました。イエス様は「わたしの十字架の死によってあなたの罪はすべて赦（ゆる）され、忘れられているよ」と言ってくださり、私は罪から解放されイエス様を礼拝せざるを得ない者とされたのです。

わたしが目を留める者は、へりくだって心砕かれ、たしのことばにおののく者だ。（イザヤ　66・2）

しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。（イザヤ　53・5）

祈子の不登校について「生きているだけで感謝」と一切をイエス様にゆだねることにしました。イエス様は祈子を元気にして下さり新たな人生を歩み始め、やがて結婚へと導かれました。

ところが、二〇一二年、六月初め、祈子は夫と共に実家に戻ってきました。心の病になっておりました。私たちは時々会っていながらまったく気付いておりませんでした。彼女は看護士となり、また四歳になろうとする璃祈と二歳の大士の母で二人の子を連れて実家の私たちのところに、よく遊びに来ておりました。ピアノの好きな彼女は集会の賛美歌集「日々の歌」一五二番「主が下さる安けさは」を演奏していたものです。その年のお正月には「私はイエス様に愛されていてうれしいわ。夢を見たの。イエス様が手を大きく開いて、祈子わたしのところにおいでとおっしゃったのよ」と申しておりました。

午前中は心が安定して静かに過ごせました。「ここで礼拝しているのね。元気になったら子どもたちを連れて私も礼拝に出たいな」などと言いますので、私たちは希望さえ持ったものです。しかし午後になり夕方になると、彼女は別の人格に支配されているような言動になり、私たちはお医者さんに相談し、大学病院に紹介状を書いてもらうことになりました。しかし紹介状をもらいに行くことになっていた日の朝、裏庭で横たわっている祈子のなきがらを発見したのです。私たちは泣きに泣きました。

6人の証し

それでも、主が天国に召してくださったのだと私たちは確信しました。この世で生きるのが苦手な祈子を「もういいよ。わたしのところに来て休みなさい」と抱いて引き上げてくださったのだ。イエス様はみことばのとおり、最善をなしてくださった。祈子はすばらしい天の御国でイエス様と一つになり、イエス様の御腕の中で憩っている。私たちは永遠のいのちによって天国で再会できる。何とすばらしく、幸いなことだろうと思わされたのです。

前夜式と召天式には九州の各地から兄弟姉妹が集って賛美してくださり感謝でした。祈子は本当に平安に眠っているようなきれいな顔をしており、イエス様が守ってくださったと確信しました。私たちはイエス様だけの平安に守られ、主を賛美して祈子を送ることができましたし、その後も主の平安のうちに守られております。

私たちは十数年続いたメサイヤ公演にて賛美してまいりました。兄弟姉妹との賛美は喜びであり力です。メサイヤ公演がなくなってから後は賛美歌集「日々の歌」を賛美する会に参加させていただいておりますが、兄弟姉妹の互いの祈りはイエス様を中心とする家族の愛を深め、互いの支えとなり力となります。

私は四年前に盛岡喜びの集いに参加した際、証しの機会を与えていただきました。その際に九州から三十名近い兄弟姉妹が参加して下さり、司会、お祈り、賛美などを通して、主が大いに祝福してご栄光を現わしてくださり心から感謝でした。

イエス様に救われイエス様の血によってすべての罪が赦され、永遠のいのちによって死んでも生きる者とされていることは感謝です。また、目にこそ見えませんがイエス様である聖霊が私たちの中に住んでくださり、新しい創造を成して豊かな祝福の中で、希望を持って歩めることも感謝です。また、イエス様がお迎

えに来てくださる御再臨の日を待ち望み、日々主を喜び、賛美して歩めたらと願っています。

イエス様はまことの救い主で私たちを失望させることのない方。天地創造を成し、何でもおできになる方。そして私たちの身代わりに死んで下さった愛の方。重荷、悲しみ、苦しみ、孤独、空しさにある方々はイエス様を知って救われて欲しいです。イエス様は悲しみを喜びに変えてくださいます。どうぞ「イエス様」と名を呼んで下さい。必ず答えて下さいます。

心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。悲しむ者は幸いです。その人は慰められるからです。

（マタイ　5・3〜4）

主は私の羊飼い。私は、乏しいことがありません。

（詩編　23・1）



高橋　勇（たかはし　いさむ）

一九四九年　岩手県岩手郡岩手町生まれ、盛岡第四高校卒、明治大学文学部卒、小林にて黎明塾経営、現在退職

妻　一枝、長男　勇一郎、次男　芳也、次女　大牟田真理子、三男　慶

6人の証し

苦難の日には、わたしを呼び求めよ



高橋一枝さん（一番右）と夫の勇さん（右から二番目）

高橋　一枝

私は、一九五二年十二月十五日、山本家の長女として宮崎県小林市に生まれました。父はその頃、信用金庫に勤務していましたが、日本キリスト教団小林教会に属して会計、日曜学校の教師もしていたので、四人の子どもたちは、教会学校で、父から聖書の話を聞いておりました。家は、雨が降れば雨漏りがし、あちこちにあき缶や洗面器を置くような家でした。祖父山本次太郎、祖母ナミエ、両親、四人の子どもたちと狭い家に八人家族でした。

祖父母は、仲が悪く、毎日のように言い争いをし、喧嘩をしていました。母はいつもグチばかり言い暗い表情でした。私は、どうしたら母が喜ぶのかいつも考えていました。いろいろな花を摘んで来ると母の顔が明るくなるので、母によく花を持ち帰っていました。でも、母は自分のことで精一杯で、私に「今日、学校はどうだったね」と聞くこともなく、私は、長女でもあり甘えることを知らない無口な子どもに育ちました。

平日は学校に行き、日曜日は教会に行き、聖書の神様が、私の神様でした。

高校卒業後、東京の大学に入りましたが、何の興味もありませんでした。ただ大学に入ったら合唱部に入ることだけは、心の中で決めていました。その時出会ったのが今の主人です。

私は小さい頃、ソプラノの歌声を聞いた時、あの美しい声はどうしたら出せるのだろうと不思議に思い、あこがれがありました。商学部にまったく興味のない私は、二年生で休学届けを出し音大へ行くための勉強を始めました。けれども結局、音大には行かず、私が二十三才、主人が二十六才の時、結婚して私の故郷宮崎県小林市に移り、私の両親との四人家族の生活が始まりました。

それらの歌の勉強は、後に集会でメサイヤの賛美に参加した時に大いに役に立ちました。この賛美への参加により、ますます、主を賛美する思いが大きくなりました。私はソプラノ、主人はテノールに入れて頂き、賛美は、私たちの喜びと力になりました。

ラッパを吹き鳴らす者、歌うたいたちが、まるでひとりででもあるかのように一致して歌声を響かせ、主を賛美し、ほめたたえた。…「主はまことにいつくしみ深い。その恵みはとこしえまで。」と主に向かって賛美した。そのとき、その宮、すなわち主の宮は雲で満ちた。

（2歴代誌　5・13）

子どもたちのこと

私たちには結婚して五年間、子どもは与えられませんでした。もう与えられないのだとあきらめていた頃、祈子（のりこ）が与えられました。

それから、次々と五人の子どもが与えられました。主人は二階で学習塾をしておりましたが、子どもたちが毎晩のように兄弟喧嘩（げんか）をし、大声で泣き叫ぶので、

6人の証し

二階から主人が降りて来て「何があったんだ」と注意する日々でした。私は、頭に重い兜を被ったように頭を抱えておりました。「このままで良いのかな」と主人に言いましたら、「喧嘩にも意味があるのではないか」と言われ、それからは、あまり悩まなくなりました。小学校を終える頃には喧嘩もしなくなり、喧嘩をたくさんした分、お互いの心もわかり、仲良しの兄弟に変えられましたが、主を心から求めるには、まだ到っていません。日々子どもたちの救いを祈りつつ、主の祝福を待ち望んでいます。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。（使徒　16・31）

主は私にかかわるすべてのことを、成し遂げてくださいます。（詩篇　138・8）

長女祈子のこと

祈子は、ピアノの大好きな子どもでした。長女だったので、下の子どもたちのおむつを替えたり、ミルクをあげたりして「私は赤ちゃんが大好き」と言っておりましたので、私の中でこの子は、お母さんになっても大丈夫と思っておりました。しかし結婚して、二人目の子どもが与えられた頃から、とても怒りやすくなり、彼女の夫によると異常な行動を取るようになっていました。実家に帰って来た祈子は、三階から飛び下り、イエス様の元に帰りました。

わたしが主である。ほかにはいない。わたしは光を造り出し、やみを創造し、平和をつくり、わざわいを創造する。わたしは主、これらすべてを造る者。（イザヤ　45・6～7）

突然の出来事ではありましたが、主からのものであ

ると確信し、兄弟姉妹の祈りに支えられ平安の内に守られ感謝でした。集会の賛美歌集「日々の歌」百七十四番を歌うよう示されました。

人知れぬ重荷背負いて、荒れ果てた野をゆき、
傷つき倒れるその時、主は抱きしめたもう。

「泣けよわが子よ、胸に抱かれて。
あなたが歩いた苦しみ、わたしが知っている」と。

祈子（のりこ）のことをすべて、知っていてくださった主イエス様、みもとに引き上げてくださった主イエス様に感謝致します。

両親のこと

両親は家でソロバンと習字の塾をし、私は家事全般のことをしておりました。父は退職して、自由になりましたので、南画（なんが）、剣舞（けんぶ）、短歌、俳句、オカリナ、旅行などの趣味に走り回り始めました。

ところが私は、自分がお手伝いさんのようになり、食事をテーブルに並べ「ご飯ですよ」と呼ぶだけを繰り返す毎日でした。黙々と食事をし「お茶」、「水」と命令されるとその場にいられなくなり、小さい子どもを抱えて外に飛び出たことが何度もありました。そんなある日、「お前は、自分の子どもを愛しているだろう。お前を産んだ母もお前を同じように愛しているよ。でもお前は、そんな母親を愛していない」と神様から私の愛のなさを示され、私はその場にひざまずいて、「私は母を愛することは出来ません。復活されたイエス様が愛してくださらなければ、私には母を愛する愛はありません」と祈りました。すると、いままで感じたことのない、平安と喜びが、心の中に湧き上がって来ました。それでもまた肉の思いが強く湧いてきて悩むこともありましたが、イエス様の十字架を見上げて歩んで来ることができました。

「あなたの父と母を敬え。」これは第一の戒めであり、

約束を伴ったものです。すなわち、「そうしたら、あなたはしあわせになり、地上で長生きする。」という約束です。

（エペソ　6・2～3）

六十五才になって

私は早く六十五才にならないかなあと待ち望んでいました。子育てからも、介護からも解放され、わずかではありますが年金がもらえ、自分の自由になると思っていました。しかし現実になってみると、歯はボロボロになり、元気がなくなり、咳が一カ月以上も続き、声が出なくなり、歌も歌えなくなりました。同級生に会って現状を話すと、「それが六十五才になって年金をもらうって言う事だよ」と話してくれました。

主人が完全に仕事を辞めて二人だけの生活になると、もっとひどい状態になりました。すべてを監視され、すべてを否定され、自分の居場所がなく、心の中はいつも泣いている状態になりました。私はわかってもらいたいと思い大きな声で怒鳴ったりしていました。絶望の中からすべてを主に打ち明け、こんな状態から解放してくださいと祈りました。すると主は次のみことばを示してくださり、解放してくださいました。

兄弟たち。互いに悪口を言い合ってはいけません。自分の兄弟の悪口を言い、自分の兄弟をさばく者は、律法の悪口を言い、律法をさばいているのです。

（ヤコブ　4・11）

兄弟に向かって腹を立てる者は、だれでもさばきを受けなければなりません。…また、『ばか者。』と言うような者は燃えるゲヘナに投げ込まれます。

（マタイ　5・22）

人の心は何よりも陰険で、それは直らない。

（エレミヤ　17・9）

そのとき、イエスはこう言われた。「父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」（ルカ　23・34）

「父なる神様。私たちをお赦しください。私たちは、何をしているのか自分たちでわからないのです」と祈るよう示され、解放してくださいました。そればかりか、歯医者さんに行って歯も整えてくださり、元気になり、歌もまた歌えるようにしてくださいました。本当に感謝です。

主は私の力、私の盾。私の心は主に拠り頼み、私は助けられた。それゆえ私の心はこおどりして喜び、私は歌をもって、主に感謝しよう。（詩篇　28・7）

どうしようもない私たちのためにイエス様は、十字架にかかってくださり、信じる者を義と認めてくださいました。イエス様に心より感謝しています。どのような時にも、主からすべてを受けとって、主がいつも共にいてくださり最善へと導いてくださることを確信し、祈りながら歩みたいと思っています。

あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。（詩篇　37・5）

高橋　一枝（たかはし　かずえ）
一九五二年、宮崎県小林市生まれ、小林市立南小学校、小林中学校、小林高校卒、明治大学商学部　中退夫　勇

6人の証し

Unser HERR lebt

私を元気にして下さったイエス様

宇賀治 京子



中央が宇賀治京子さん。左は松田瑞子(みずこ)さん、右は今橋由実子さん

私は、一九六〇年に福井県勝山市で生まれました。現在、五十八歳です。三人兄弟の末っ子で、二人の兄とは随分年の離れた女の子だったので、甘やかされて育ちました。

父は、繊維会社を経営しながら天職の教師をしており、母は専業主婦でした。家には、立派な仏壇と神棚があり、いつもきれいに手入れされていました。私は小さい頃からピアノを学び、練習に明け暮れる毎日でした。京都までレッスンに通う熱の入れようでした。

二十三歳の時に、最愛の母をがんで亡くしました。三十年あまり昔のことだったので、治療法も少なく、随分悲惨な死に方でした。その時父は、ある姉妹によって、重田夫妻とお交わりの機会を与えられましたが、父は仏教大学を創設したくらいの人でした。私もその仏教大学で学びましたが、特に印象はなく、ただただピアノの練習をするばかりの日々でした。

母の死は大変なショックでしたが、その時私にはも

う家庭がありましたし、夫も子供もいましたので、毎日の生活に追われ、幸せに過ごしておりました。夫の転勤もあり、忙しい日々で、イエス様にも、聖書にもふれる事なく、生きておりました。ただ、漠然と母のひどい死に方を見て、死ぬのは怖い、死んだらどうなるのかという不安はありました。

二〇〇一年に、頼りにしていた夫ががんになりました。長くつらい闘病生活が続き、少しずつイエス様への求めが始まりました。病院の行き帰りにバッハのカンタータを聴きながら、これは天国のことを音楽にしているのだと確信したからだと思います。

私は随分がんばって、夫を看病しました。自宅に居たいという夫のために、看護師の資格もないのに、点滴の方法なども教えてもらい、尽くしましたが、結局夫は亡くなりました。私には深い後悔が残りました。それは、私は夫に何もしてあげられなかったということや、死んだ方が楽になるのではないかと思ってしまったことです。死ぬのが怖いと言う夫に、何も言ってあげられなかった事もとても悔やまれます。もう少し早くイエス様に出会えていたらと、今も思います。

重田夫妻とのお交わりが与えられ、「あなたの後悔、あやまちは、すべてイエス様が負ってくださるので、あなたは重荷をおろしなさい」と言われ、救われました。その時から、集会に集わせていただいております。

主には出会わせていただきましたが、福井には集会もなく兄弟姉妹もおられなくて、一人よがりな信仰になりがちでした。でも、イエス様のおかげで、すべてがうまくいくようになりました。娘の進学、子供二人の就職、私の一人暮らし。夫がいなくても、うまく進みます。私は本当に感謝して、喜んで、この世を謳歌しました。

夫の両親の介護など、大変なこともありましたがすべてうまく行きました。

しかし今から思うと、私は感謝も祈りもしました

が、へりくだってはいませんでした。自分の力で、全部やっている気でいたのでしょう。

神は、さらにゆたかな恵みを与えてくださいます。ですから、こう言われています。「神は、高ぶる者を退け、へりくだる者に恵みをお授けになる。」（ヤコブ　4・6）

傲慢な私は、夫の死から立ち直った気でいました。ピアノも役に立ちました。集中すると、いろいろ忘れられるからです。今から考えると、どこかですべてをイエス様におゆだねしていたのではなく、主だけを見上げているのでもなく、中途半端な信仰になってしまっていました。集会も兄弟姉妹もおられない中での信仰は、この様になりがちなのだと今ではすごくよくわかります。このまま、私はピアノを弾きながら死んでいくのだろうと思っていました。

ところが、イエス様はそんな簡単なシナリオではすまされませんでした。二〇一二年のある日、私は左指の違和感を覚えて病院で検査したところ、脳幹という脳の大事な場所に血管腫瘍があり、じわじわ出血している事がわかりました。違和感は広がり、目も耳も顔もしびれておかしくなり、歩行にも障害が出始めました。そのままで手術しないと昏睡状態になると言われ、寝たきりになるリスクもありましたが、大手術をしていただきました。その時は、たくさんの兄弟姉妹に祈っていただいたおかげで、手術は成功し血管腫瘍は取り切ることができました。本当に感謝しました。しかし、たくさんの後遺症が残りました。ここからが、本当の苦しみの毎日となりました。

左手にしびれが残って、あんなに弾いていたピアノが弾けなくなりました。いつも頭に岩が乗っている感じで、何も楽しめません。自慢するくらいの読書量でしたが、目の焦点が合わなくて、本が読めなくなりました。大好きな車の運転もできなくなりました。ふら

ついてバランスがとれず、いつもめまいの状態で、歩くのも大変です。バラ畑を作って、きれいにバラを咲かせ、誇っていましたが続けられなくなりました。

命に別状はないのですが、生きていくのに大変不都合な状態になりました。見た目では障害がわかってもらえないことも、つらい原因になりました。すっかり別の自分にされてしまいました。

イエス様に、「すっかり別の自分にされた感じです。治してください」とどれだけ祈ったかわかりません。「元の体にして下さい。一つだけでも症状を治して下さい」と私は毎日祈りました。

でもどれだけ祈っても、治りません。私はたくさんのものを失ってしまいました。精神的にもダメージを受けた私は、一人でいられなくなり、すべてを捨てて娘の嫁ぎ先の近くに身を寄せました。小さくて暗いマンションでした。そこに入るために、たくさんの大切にしていたものを、全部処分しました。家もピアノも売り、身の回りのもの以外はすべて捨てて来ました。

しばらくは、音楽も聴けなくなりました。元気なころを思い出すからです。イエス様に「助けて」と祈りながらも、信仰のうすい私はイエス様を憎むくらいでした。娘にも、「死にたい。死にたい。」と毎日言って、何のための信仰なのかとあきれられるような状態でした。なぜこんなに私を苦しめられるのか、私にはわかりませんでした。自分が世界中で一番不幸だとばかり思っていました。

しかし、娘のところに来たおかげで、名古屋集会に集わせていただけるようになりました。そのおかげで、絶望の中にいた私のところへたくさんの姉妹たちが来てくださいました。その頃の私は、泣いてばかりで、希望もなくすべてを恐れていました。私を見て、随分元気のない、信仰のうすい者だと思われたと思います。その頃の私は、かげろうの様だったと言われます。

そんな中にいても、私は自分で何とかしようとして

6人の証し

Unser HERR lebt

いました。高いお金を払ってカウンセリングを受けてみました。お金で雇われているカウンセラーは、私の状態を全く理解できず持て余しているのは明白でした。薬も試しました。医者から抗うつ剤をすすめられ、飲みましたが、うつ病ではないので効きません。

すっかり本当にくだかれた私は、ついに主の前に跪(ひざまず)く様になりました。絶望の中にいる私に、姉妹たちは「主に愛されているから困難に合うのよ。苦しみは神の恵みなのよ」と教えてくださいました。

私の恵みは、あなたに十分である。というのは、私の力は弱さのうちに完全に現れるからである。

（2コリント　12・9）

なかなか障害を恵みと思えない私でしたが、姉妹たちにみことばなども教えていただいたり、祈っていただいたりしてイエス様にだんだん近づいていると感じていました。急に不安になり、姉妹に助けを求め、寄り添っていただき、これも全部主からなのだと感謝することもありました。何をするときもイエス様に祈っています。そうしないと、生きていけないのです。歩く時も、支えてくださいと祈り、倒れませんようにと祈ります。

人の歩みは主によって確かにされる、主はその人の道を喜ばれる。その人は、倒されてもまっさかさまに倒されはしない。主がその手をささえておられるからだ。

（詩篇　37・23～24）

私を見捨てないでください。主よ。わが神よ。私から遠く離れないで下さい。急いで私を助けてください。主よ、私の救いよ。

（詩篇　38・21～22）

手術から五年たちました。今は七年目です。体は全

く良くなりません。でも、この病のおかげで、今は本当にイエス様が近くにいて下さると感じています。私は、歩くと倒れそうになりますが、転んだり、倒れたりしたことがありません。イエス様が支えてくださっているのです。

いろいろ教えていただいた姉妹とは、祈り会も始められ、今も続いており、私にとっては大きな慰めになっています。かげろうの様だった私が、本当に元気になってきたのです。

ある時私は思いました。少しくらいピアノが弾けたり、動き回ることができるより、イエス様に出会えたことの方がずっと大きい喜びであると。

何年もかかりましたが、やっとわかったのだと思いました。これは、新しい体にならなければ、わからなかったことです。イエス様は私に病を与えて、本当の恵みを教えてくださったのです。

また、うれしいこともありました。

わたしを呼べ、そうすれば、わたしは、あなたに答え、あなたの知らない、理解を超えた大いなる事をあなたに告げよう。（エレミヤ　33・3）

このみことばが本当になりました。

娘夫婦と一緒に住む新しい家が与えられ、二〇一七年六月には娘に赤ちゃんを授かりました。私は自分が立っているだけでも大変なので、抱っこができないからさみしいと思っておりましたが、不思議なことにこんな体なのに、赤ちゃんを抱けるのです。これは、大変な喜びで赤ちゃんにはすごい力があり、病気を忘れさせてくれます。こんな体になってしまったのに、まだお前にはできることがあると、教えられた気がします。本当に理解を超えた大いなることだと、イエス様に感謝しています。

私の恵みは、あなたに十分である。というのは、わた

6人の証し

しの力は弱さのうちに完全に現れるからである。

（2コリント　12・9）

このみことば通りに今日も生かされています。

私のことが心配で結婚に踏み切れなかった息子も、今年結婚できました。そのため私は一人で東京へ行くことになりました。東京で歩いている自分が信じられませんでした。すべてイエス様のおかげです。

生きているのか死んでいるのかわからないくらい、絶望の中にいた私を救ってくださって、本当に感謝しています。名古屋へ来た頃のかげろうのような私とは別人のように、元気にしていただきました。毎日毎日、祈って感謝して、喜んでいます。もう昔の自分に戻りたいとは思いません。

思い煩(わずら)いもありますが、イエス様を信じて、おゆだねしているので安心です。

夫が待っている天国へ行くまで、この体でも助けていただいて、生きていきます。

これからも、そばで支えていただきたいです。

宇賀治　京子（うがじ　きょうこ）
一九六〇年九月三十日生まれ、仁愛女子短期大学音楽学科ピアノ専攻、春日井市在住



イエス様が与えてくださったもの

塩田 ルカ

それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。
（エレミヤ　29・11）



塩田ルカさん（左）とご家族

私はクリスチャンの両親のもとに三男として大阪で生まれました。

私を出産する際、母はひどい妊娠中毒症になり、担当の医師からは「流産させるか、母子ともに死ぬかどちらかを選択してください」と言われたそうです。

母はあまりの苦しさに出産することをあきらめかけたそうですが、父が「お前の信仰はどこにいった！　祈ろう！」と二人でイエス様に祈ったそうです。そうして祈りは聞かれ、母は命を取り留め、私は無事に生まれることができました。そのように生まれたときから大きな恵みをいただいた私でしたが、本当に小さな頃から両親に逆らってばかりの我の強い者でした。（今でもそうです…）。

両親がクリスチャンであったため、教会には物心(ものごころ)がついたころから通っていたのですが、教会の友人や日曜学校の先生に対しても好戦的な態度をとる人間でした。そんな私でしたが、教会で聞く聖書の話にはなぜか逆らう気持があまりなく、毎週日曜日が来るのを楽しみにしていました。でもある日、そんな私に転機が訪れました。相変わらずの性格のまま小学校の高学年になっていた私はあるグループの一人と些細(ささい)なことでもめ事を起こしました。いつもならそのまま日常に戻るのですが、その時は違いました。喧嘩(けんか)のあと、その一人がグループのメンバーとその取り巻きを連れて仕返しに来たのです。とても人数が多く、その当時は学校が荒れてひどい事件も多かったため、これは喧嘩に負けるどころか、命を落とすことになるかも知れないと感じました。その時、生まれて初めて「イエス様！　助けてください！」と、心からお祈りしました。そのあと、実際に「私一人」対「大人数」の喧嘩になり、もちろん勝つことはできなかったのですが、不思議なことに大したけがもせずにすみました。ただその時に、私と仲が良いと思っていた友人が喧嘩(けんか)相手のメンバーに加わっていたのを見て、とても悲しい気持になり、そのショックから生きることがいやになっていきました。それからというもの、前向きなやる気のようなものが私の中にほとんど無くなり、学校から家に帰っても何のために生きているのだろう?というようなことばかり考えるようになっていました。人間不信になった私は、その気持を誰にも伝えることができず、本当に苦しい時を過ごしました。

そしていつの間にか私は夜になると聖書を読むようになっていました。

人間は自分も含めて信頼できないが、イエス様ならきっと信頼できる、という思いが与えられたからでした。

主よ。私の祈りを聞いてください。私の叫びが、あなたに届きますように。私が苦しんでいるときに、御顔を私に隠さないでください。私に耳を傾けてください。私が呼ぶときに、早く私に答えてください。私の日は煙の中に尽き果て、私の骨は炉のように燃えていますから。私の心は青菜（あおな）のように打たれ、しおれ、パンを食べることさえ忘れました。私の嘆く声で私の骨と皮はくっついてしまいました。私は荒野のペリカンのようになり、廃墟のふくろうのようになっています。私はやせ衰えて、屋根の上のひとりぼっちの鳥のようになりました。

（詩篇　102・1〜7）

主よ。いつまでですか。あなたは私を永久にお忘れになるのですか。いつまで御顔を私からお隠しになるのですか。いつまで私は自分のたましいのうちで思い計らなければならないのでしょう。私の心には、一日中、悲しみがあります。

（詩篇　13・1〜2）

6人の証し

Unser HERR lebt

そうして毎日のように聖書を読むうちに、だんだんと今までの自分の罪や、自分も含めた人間の空しい力に頼って生きていた惨（みじ）めな自分を知ることになりました。

そんなある日、両親が、それまでずっと通ってきた教会を家族で出ることにしたという話を私にしました。その教会には小さな頃からの友人がたくさんおり、私は大反対でした。「教会を出てこれからどうするの？」と、私が両親に尋ねると、他の教会に行くと言うだけでした。そうして本当にその教会を出ることになり、その後、いくつかの別の教会に通っていたある日、「キリスト集会という牧師制度のないところがあるらしい。そこに行こう！」と両親が言い出しました。教会はどこでも同じだろうと思っていた私でしたが、そんなに言うのであれば一度くらいはキリスト集会に行ってみようと思い、両親に連れられて神戸集会に参加しました。その初めて訪れたキリスト集会での礼拝が、今ま

で私が通っていた教会とはあまりに違うので驚き、そして戸惑いました。今思うとキリスト集会は人間が中心ではなく、イエス様のお導きを大切にしていることを、その時に感じたからなのかも知れません。そうして、その次の週から私達家族はキリスト集会に集うようになりました。

集会にしばらく通っていると、集会に集っている方々からベックさんのことをよく聞くようになりました。牧師制度がないといっても、皆さんから慕われているベックさんはきっとこの集会の牧師さんのような人なんだなと、私はそうとらえていました。正直なところイエス様より、ベックさんを信じている人もいるのでは?と、愚かにもそう思ったことさえありました。そんなある日、ある方がベックさんに悩みを相談したところ、ベックさんは「私は何を聞いても右から左だよ。イエス様に一緒にお祈りしよう」と言われたと知りました。それまでの私は、牧師やそのような立場にあるただの人間に頼るなんて!と心の中で批判していたくせに、実際の私はイエス様に頼らず、牧師どころか自分という人間に頼っていました。イエス様にお祈りして全てをおゆだねするということがわからず、イエス様を信じているのに、暮らしや心配ごとや将来について自分でなんとかしようともがいていました。ベックさんの一言をきっかけにそんな自分の姿を知り、恥ずかしくなりました。

ひょうがその斑点(はんてん)を、変えることができようか。もしできたら、悪に慣れたあなたがたでも、善を行なうことができるだろう。
(エレミヤ　13・23)

人の目にはまっすぐに見える道がある。その道の終わりは死の道である。
(箴言　16・25)

人は心に計画を持つ。主はその舌に答えを下さる。

人は自分の行ないがことごとく純粋だと思う。しかし主は人のたましいの値うちをはかられる。あなたのしようとすることを主にゆだねよ。そうすれば、あなたの計画はゆるがない。（箴言　16・1～3）

空の鳥を見なさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、倉に納めることもしません。けれども、あなたがたの天の父がこれを養っていてくださるのです。あなたがたは、鳥よりも、もっとすぐれたものではありませんか。あなたがたのうちだれが、心配したからといって、自分のいのちを少しでも延ばすことができますか。（マタイ　6・26～27）

だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。だから、あすのための心配は無用です。あすのことはあすが心配します。労苦はその日その日に、十分あります。（マタイ　6・33～34）

そういったことがあったにもかかわらず、その後、社会に出た私は、だんだんと仕事で日曜日に休みを取ることが難しくなり、少しずつ、また自分や自分達でなんとかする、というような空しい日々に戻っていきました。しかし、そんな日々にもやはり限界がきました。都合で私は十年以上働いた職場を離れることになりました。そしてその時に与えられた思いは、次の仕事は日曜日を休日にし、また集会に集えるようになりたいという思いでした。この思いはもちろん、とてもわがままな私から出たことではありません。

あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。（ヨハネ　15・16）

6人の証し

その当時すでに結婚をし、三人の子供にも恵まれていたので、大きな生活の変化に対する不安もありましたが、イエス様が最善をなしてくださるという思いが与えられ祈りながら進むことができました。現在家族で暮らしているところは山の中にある昔ながらの地域です。秋にはみこしをかつぐような祭りもあり、引っ越してきたばかりの頃は、大阪との文化や風習の違いにとまどい、そしてなにより神社と地域との結びつきが強く、神社を中心とした会合が多く驚きました。

地域の祭りの際、ふだんから優しく接してくださる地域の方々に、「イエス様を信じているので、みこしを担ぐことはできません」とお断りしなければならなかった時、とても怖かったのですが、祈りがきかれ「日本では憲法で信仰の自由が認められている」と地元の方がかばってくださいました。

あなたがたは心を騒がしてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。（ヨハネ　14・1）

からだを殺しても、たましいを殺せない人たちなどを恐れてはなりません。そんなものより、たましいもからだも、ともにゲヘナで滅ぼすことのできる方を恐れなさい。（マタイ　10・28）

そうして生活が変わり、三年ほど経ったとき、私の両親が仕事を辞め、私達の近くに越してくることになりました。その時、私はもう何年も前から母と祈っていたことを思い出しました。「いつの日かまた家族で日曜日に仕事を休めるようになり、父とともに家族で集会に集えますように」という祈りでした。私の父は仕事が忙しく、集会に行けなくなり、そのまま集会に集わなくなっていたのでした。仕事や気持の面で、参加しづらいというのは私もなんとなく察していたので、実現は難しいことだと思っていました。でもあき

らめきれず、母と祈るときは父のことも祈り続けていました。

そして両親が越して来てすぐの日曜日に、一緒に集会に行こうと誘ってみると、本当に父も母と一緒に来てくれました。もう十年以上一緒に賛美をしたこともなかったのでとても嬉しく、神様に感謝しました。

見よ。わたしは、すべての肉なる者の神、主である。わたしにとってできないことが一つでもあろうか。

（エレミヤ　32・27）

今こうして家族で集会に集い、賛美をしたり、お祈りすることができ、たくさんのみことばをいただけることは私にとって本当に幸せなことです。

わたしは主、あなたをいやす者である。

（出エジプト　15・26）

主は人の子らを、ただ苦しめ悩まそうとは、思っておられない。

（哀歌　3・33）

子供の頃からイエス様のことを聞いていたにもかかわらず、自分の力でなんとかしようと、ずっともがき続けてきた私は、いつの間にか、「自分の力に頼っても今までろくな事にならなかった…。まずはイエス様にお祈りしよう」と、思うようになっていきました。今でもとてもひどい私ですが、こんな私でも豊かに赦し、愛してくださり、想像していなかったような素晴らしい恵みを与えてくださるイエス様にお会いできる日をとても楽しみにしています。

あの方は盛んになり私は衰えなければなりません。

（ヨハネ　3・30）

聖書はこう言っています。「彼に信頼する者は、失望

6人の証し

Unser HERR lebt

させられることがない。」　（ローマ　10・11）

しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、――あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。――

（エペソ　2・4～5）

塩田　ルカ

一九八〇年　大阪府堺市生まれ。現在は徳島県の山間に家族五人で暮らしながら小さな飲食店を営む

妻　舞（まい）

長男　とわ

長女　あかり

次男　種人（たねと）



生めよ。ふえよ。地を満たせ

芳我 幸雄



妻の雅子さんと

私は、一九五〇年、東京都豊島区で生まれました。家族は両親と祖母、兄と妹の六人家族でした。実家周辺は自然がなく、近所の川としては、その当時既にコンクリートで三面張りにされた神田川しかありませんでした。近所の野山で遊ぶような経験は殆どしたことのない子供時代でした。

私の生い立ちは自分では概して平凡なものだと思っていますが、客観的な見方をすれば挫折の連続でした。祖母の教育に対する熱心さはかなりのものでした。我が家では祖母の権力が絶大で、嫁である母の意見は通らない家でした。祖母に有名幼稚園に入るための塾のような所に連れて行かれた記憶がかすかにあります。結局、国立大の付属幼稚園の受験に失敗したことから始まって大学受験で三年浪人した挙句、方向転換するまで、桜は散り続けました。私の特徴は良く言えば辛抱強い、悪く言えば鈍感と言えるのではないでしょうか。

一方、私には趣味が沢山ありました。楽器演奏に始まり、海、山の各種スポーツ、水中写真撮影等々です。二十五歳で就いた仕事は、民間の環境調査会社で海辺や海底の生物の生息状況や変化を記録・報告するという趣味の延長のような仕事でした。結局、自分のやりたいことをやり続けるという、今思い返すと自己中心の極みなのだということを思わされます。

三十才で家内と結婚しました。その時出向していた研究所の上司の紹介でいわゆる見合い結婚でした。娘が二人与えられました。

そのような私が、イエス様に救われたのは、一九八九年、三十九才の時でした。その頃考えていたことは、二つありました。

一、死ぬのが怖い！　人は死んだら、どうなるのだろう？　どこへ行ってしまうのだろう？

二、人間は、何の権利があって、地球上にふえ続けているのか？ということでした。

最初の死の問題については、一緒に暮らしていた祖母が私が三十四歳の時に亡くなったことがきっかけで、私の頭の片隅に居座るようになりました。そして三十八才の時に、衝撃的な経験をしました。仕事で埼玉から大阪に向かって東名高速を車で走っていた時のことです。高速道路であるのに、渋滞で完全停止してしまった車の列に、居眠り運転の大型トラックがノーブレーキで突っ込んで来たのです。幸い私の乗っていたワゴン車は六台の玉突き衝突事故の最前列となり、前の車には当たらずにすみました。後ろの車五台は全部大型車でした。私の乗っていた車の後部はへこみましたが、けがはありませんでした。しかし、「もし自分の車が、一台後ろにいたら大型車の間に挟(はさ)まれてペシャンコになっていただろう」という状況に、背筋の寒くなる思いをしました。どんなに若くて元気でも、その命が今終わるかも知れないと思い、死のことを真剣に考えるようになりました。それまでは、怖いので

考えないようにしていましたし、考えても答えが見つかるとは思えなかったからです。

二番目の、人間は、何の権利があって、地球上にふえ続けているのか?と思うようになったきっかけは、学生時代に三年間を北海道で過ごした時にあります。自然豊かな北海道に夢中になり、北海道に生息しているイトウという魚の生態を卒業論文のテーマに選びました。イトウは、川と海の間を行き来しながら十年以上生き、一メートルを超える大きさにまで成長します。イトウが成長するのに必要な環境は、湿原の中を蛇行しながらとうとうと流れる淀(よど)みであり、その上流には産卵(さんらん)のための砂利(じゃり)底の清流も必要です。しかし、約四十年前の北海道でも牧地化が進められており、生活の場所をせばめられてしまったイトウの生息環境を目の当たりにしたことは、私にとって大変心を痛めることでした。社会人になって選んだ仕事が、環境調査会社で水域の生物調査を行ったり、自然再生の手助けをすることだったこともあり、地球上に人間がふえ続け、自然破壊の限りを尽くしていることに危機感、罪悪感、嫌悪感(自分を含めて)を持っていました。少なくとも「人間だけが、地球を我が者顔で使っていいわけがない」と思っていました。

東名高速の追突事故にあった三十八才の頃の我が家は大変な時期でした。私の仕事の忙しさはピークでした。長い出張で家を不在にすることが多かった上に、私が家に帰ったとしても、残業か飲み会で殆(ほとん)ど午前様というありさまでした。家の中はいさかいが絶えませんでした。家内は四才と一才の娘を抱えて子育ての悩みや、家のことを顧みない夫に疲れ果てていました。家内は、クリスチャンの友人に誘われて近所(埼玉の草加)の教会へ行き始めていました。

そのような状況の中で、クリスマスイブに長期出張から家に帰ると、丁度(ちょうど)、家内と子供たちが玄関から出かけようとしているところでした。家内に、これか

らクリスマスの礼拝に一緒に行かないかと誘われて、あっさりと教会について行きました。二つ返事で家内について行った理由は、単に自分の好きな西洋音楽のルーツである教会音楽に興味があったからです。その時は、神様に何かを求める思いがあったわけではありませんでした。自己中心から来る興味本位でついて行っただけでした。そして、新年早々には転勤で、大阪に引っ越すことになりました。

家内が教会に行き始めたことがきっかけで、私も一緒に教会に通うようになりました。私も一緒に教会に行くと家内の機嫌が良いので、家庭平和のために行き始めたというのが本音です。メッセージで言われていることは、なかなか良いことを言っていると思う反面、家内があまりにも、「イエス様、イエス様」と言うので、少しイエス様にやきもちを焼き、家内が私に「聖書にこう書いてある」と説明するような場面で、言い返してやろうと、私も聖書を読むようになりました。

聖書を読み始めた時に目に飛び込んできたみことばが、聖書の二ページ目にある次のみことばでした。

神はまた、彼らを祝福し、このように神は彼らに仰せられた。「生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ。」

（創世記　1・28）

神様が私たち人間に「生めよ。ふえよ。地を満たせ」と命令しておられることは、私にとって実に衝撃的なことでした。人間は生きていて良いのだ。地上にふえて良いのだ。そのことを命令している神様がおられるのだということを知りました。それまでは、居場所が定まらないような、何とも落ち着かない感覚で過ごしていましたが、このみことばを知ることが、何とも言えぬ平安をいただく始まりとなりました。「人間は何の権利があって地球上にふえ続けているのか？」の疑問

に対する答えがここにありました。権利があるどころか、神様が「生めよ。ふえよ。地を満たせ」と命令しておられたのです。また、死の問題については、次のみことばが与えられました。

イエスは言われた。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。」（ヨハネ　11・25）

その頃の我が家では、日曜日には礼拝に行き、土曜の朝にはテレビで、ある伝道番組を見ていました。その中で、このみことばを引用して、二十才の娘さんを亡くした母親の話を紹介していました。このお母さんは、娘と過ごした二十年と、娘さんを一番良い所へ連れて行ってくださったイエス様に感謝したという話を聞いて、私にも同じ信仰を与えて欲しいと思いました。その時、何かがすとんと落ちて、涙が流れて止まりませんでした。

6人の証し

創世記一章二十八節のみことば「生めよ。ふえよ。地を満たせ」には、大変心を動かされましたが、一方でこの箇所を含む、創世記一章一節から二章一節までに書かれている、六日間で神様がこの世界を創造された内容、特にその六日間でという時間スケールに引っ掛かり、なかなか理解することができませんでした。しかし、聖書の他の箇所をみると、大工ヨセフの息子として生まれたイエス様が、十字架に架かって死なれた事実がはっきりと記されています。さらに、三日目の日曜日のイエス様の甦り（よみがえり）や、甦り（よみがえり）から五十日目の五旬節を境に、弟子たちが変えられた事実が書かれています。また、創造論や進化論の本を色々読みましたが、なかなか結論に至りませんでした。結局、イエス様の十字架上での犠牲や甦り（よみがえり）、その後の聖霊降臨（こうりん）は確かにあったと信じることができたので、聖書全体をまるごと信じることにしました。聖書に書いてあることを疑わず、

聖書をまるごと信じてしまえば、霊の目が開け、書いてある意味が通じるようになって来ました。

以上のような導きによって、私は、一九八九年三十九才の時、大阪の堺市の教会でそれまで待っていてくれた家内と一緒に洗礼を受けました。東名高速で死にそうになってから、ほぼ一年後のことでした。この教会に集って四年ほど経つ内に、教会からキリスト集会に移っておられた方から、集会の「光よあれ」という冊子をいただきました。その中に書かれている、イエス様に導かれた生き生きとした証しを読み、私たちもこの集会に行ってみたいと思っていたところに、再び埼玉に戻る転勤の話が出ました。この時、引越し先の草加からそう遠くない春日部にキリスト集会があることがわかり、以前家内が通い始めていた教会には行かず、春日部キリスト集会に集わせていただくようになりました。一九九三年のことでした。

救われた後も自分の肉の性質は変わらないようです。自分のことが大事、自分のやりたいことをする。自分では変わったつもりなのですが、どうやら自己中心の本質は何も変わっていないようです。私は、集会では楽器で賛美をさせていただいていますが、まごころから主イエス様に感謝をささげることの難しさを痛感しています。私は、楽器を弾くことに集中すると、楽譜に歌詞が書いてあっても音符だけしか目に入らず、ただ上手に弾こうとしてしまいます。これでは賛美ではなく、ただ単に楽器を演奏しているということになってしまいます。演奏する前に賛美している歌詞を読んだとしても、弾き始めるとどうしても音符に目が行ってしまいます。最近、私は歌詞から、みことばから目を離さないために、できるだけ歌も歌いながら賛美するように心がけています。この時を聖別してくださいと、ただ主に祈るのみです。

私は四十数年、環境関係の仕事に就いてきました。

その中でも特に印象に残っている仕事に、「藻場造成」と言われている仕事があります。これは、海の中に海藻や海草を生やすことです。「造成」、「生やす」と言っても、それをしてくださるのは神様です。人間にできることは、自然の中で繁茂している海藻の生育環境を色々な側面から調べ、海藻がそこに生えている仕組みや、神様の創られたメカニズムを知り、それに逆らわないように、種類を選び、効率の良い植え方を考えるだけです。「造成」が上手く行くかどうかは、神様の創られたメカニズムの理解度にかかっています。

私が植えて、アポロが水を注ぎました。しかし、成長させたのは神です。（1コリント　3・6）

私は、趣味や仕事をとおして海が大好きです。私たちが生きるために太陽と海は不可欠です。一定の条件の気候を保ち、光合成により酸素を得るためには、太陽も海も欠くことができません。しかし、聖書の最後の書、ヨハネの黙示録には、イエス様が私たちのために用意してくださっている天国について、次のように書かれています。

また私は、新しい天と新しい地とを見た。以前の天と、以前の地は過ぎ去り、もはや海もない。（黙示録　21・1）

都には、これを照らす太陽も月もいらない。というのは、神の栄光が都を照らし、子羊が都のあかりだからである。（黙示録　21・23）

イエス様が用意して待っていてくださる天国は、海もない、太陽も月もいらない所だと書かれています。子羊、即ちイエス様が「都のあかり」だからだと言っています。この世の知識では、まったく理解することは

6人の証し

できませんが、万物を創られた神様が言われることであり、約束してくださっていることです。このことを信じる信仰を与えてくださったことを感謝します。

浅はかな知識では想像することもできない天国を、イエス様は用意していてくださいます。

わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言っておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。

（ヨハネ　14・2〜3）

イエス様は、父なる神様の家には住まいが無限にあると言われます。ですから、「生めよ。ふえよ。地を満たせ」と命令されたのです。イエス様が迎えてくださるその時を待ち望みつつ過ごすことのできる平安を、ただ感謝するのみです。

芳我 幸雄（はが　ゆきお）
一九五〇年　東京都生まれ、目白小学校、高田中学校、都立大山高等学校、東海大学海洋学部卒、㈱東京久栄、中電環境テクノス㈱勤務、二〇一七年退職
妻　雅子（まさこ）
長女　智子（ともこ）
次女　黒川郁子（いくこ）家族

きょう、救いがこの家に来ました

芳我 雅子



夫の幸雄さんと

私は、一九五三年に東京で生まれました。私の育った家庭は、サラリーマンの父、専業主婦の母、妹の四人家族です。幼い頃は、渋谷区で、祖父母家族と同じ敷地に住んでいました。祖父母の出身地は滋賀県ですが、戦後の好景気を背景に、息子三人(私から見たら叔父たち)を東京の大学に出したことを機に、祖父は転職し、家族ごと東京に引っ越しました。そこには、結婚した私の両親も住んでいました。祖父母の家では毎朝、神棚にご飯をあげたり、仏壇の前で拝(おが)んだりという光景が普通に見られました。その頃は、神様のことは隣の祖父母任せで、我が家では特に神様を意識するようなことはありませんでした。

小学校の終わり頃、東京近郊の草加市にできた松原団地に、私の家族は引っ越しました。それまでの大家族のような生活から、突然、知り合いのいない環境になり、なじむのは子どもにとって大変でした。

信仰を持ったきっかけをお話しさせて頂きます。子

育てを通してでした。二十六歳の時に知人の紹介で結婚し、三十歳で長女、続いて次女と恵まれました。

思えば子供の頃から「人生とは何だろう?」というような事を考えていました。人生のむなしさをはっきりと感じたのは、たぶん四歳の頃です。祖父母の家に泊まっていたある朝、朝日が柱の節穴から差していて、布団をたたんだほこりがその光の筋の中を舞っているのをじっと見ているうちに「この光景は永遠には続かない、どこへ行くのだろう」という無常感としかいいようのない思いになったことをはっきりと覚えています。そのことを近くにいた母と祖母に話すと「この子は何て変なことを言っているのだろう」というようなことを二人で話していたので、人に話しても仕方ないのだ、と思いました。しかし、この「何処から来て何処へいくのだろう…」という思いはずっと心の奥底にありました。成長するに従って、学校や友達、毎日の生活に忙しくなり、そのような思いもいつしか忘れてしまいました。

大人に成長するまでに、イエス様に出会うチャンスはいくらもあったと思います。小学生の頃に友達に誘われて教会学校へ何回か通ったことがありますし、読書を通しても知っていたと思います。大学はミッション系で聖書の講義もありました。ちゃんと出席していましたが、何も覚えていないのです。それは多分、哲学のようなものとして聞いていたためだと思います。青春時代にはそれなりに悩みはあったはずですが、素直に求める思いが無ければ心に入って来ないのだと今ではつくづく思います。

あなたが繁栄していたときに、わたしはあなたに語りかけたが、あなたは『私は聞かない。』と言った。わたしの声に聞き従わないということ、これが、若いころからのあなたの生き方だった。

（エレミヤ　22・21）

私が求めていたものはこの世での繁栄で、いつも目の前の事に一生懸命にがんばっていたと思います。自分の人生を進めて行くものは、自分の努力だと思っていましたから、本能的に、それを妨げるような考えには蓋をして開けないようにしていたのだと思います。ところが、いざ子育てを始めてみると、その蓋をしていたことが一気に噴き出して来たようです。子供には幸せに育って欲しい。独り立ちができるまでに無事育てなくてはと気負いもします。そして、成長に必要なものは、衣食、健康、教養、モラル、思いやり…と浮かんで来ますが、果たして今度はそれらが失われないという保証もない。何かもっと深い根本的な事があるのではないか…それが欲しいという思いでした。一方、自分にはそれがないのでわからないというあせりでいっぱいでした。

話は前後しますが、私の母は草加に引っ越した頃から「婦人之友の会」に入り、合理的な家事や家庭のやり方を実践していました。その活動は、クリスチャンである羽仁もと子さんの聖書への信仰から発した、良い家庭を目指すというものでした。その頃、我が家の食事は飛躍的に手の込んだものになり、毎日の生活も時間を無駄にせずきっちりとしたものとなりました。おやつもすべて手作りで、今でもそうしたお菓子の味を忘れることはありません。しかし、母は信仰を持ったわけではなかったと思います。生活の中で信仰の話が出ることはありませんでした。私は、自分が結婚してからは、窮屈な友の会の生活を取り入れたいとはまったく思わず、むしろそこから解放されてほっとした思いでした。自分の方法でやって行こうと思っていました。ところが、子供が生まれてまったく立ち往生してしまったのです。そのような時、たまたま実家にあった「婦人の友」を読んでいると、そこに、このような言葉がありました。三十数年前のことではっきりと覚えていないのですが要約すると「子供の教育というもの

は、勉強や運動、礼儀作法や健康そういうものだけなのではなく、魂を育てることです。創造主を知ることです」という内容でした。今まで考えたことのない事柄でした。ことばで「大和魂」というようには使っていても、自分の中に「魂」があるとは考えたことはありませんでした。その時、今まで自分の中で眠っていた「魂」というものが鼓動を始めたような気がします。

それからほどなくして、クリスチャンの友人にばったり出会い、教会に誘われました。次女が生まれてしばらくした時です。三十四歳でした。初めて行ったのは、確か入門クラスだったと思います。その中で牧師が読まれた聖書のことばがマタイの福音書二十四章三十五節でした。

この天地は滅び去ります。しかし、わたしのことばは決して滅びることがありません。（マタイ　24・35）

これを聞いた時に、ああこのことが確かな事だ、このことが知りたかった事だと思えて、涙が止まりませんでした。神様が近づいてくださいました。そして、聖書をむさぼるように読み始めました。この頃、主人は仕事が忙しく、ほとんど家にいないような状態でしたので、子供が寝てから、聖書を読んだり、祈ったり出来るちょうど良い時だったのです。その後、主人も一緒に集ってくれるようになり、二年ほどして、転勤先の大阪の教会で共に受洗しました。

子育ての話ですが、結論から言いますと、全然思い描いているようには出来ませんでした。思い描いていた事が間違っていたのだと気が付いたのは、つい最近です。六十才を過ぎてからです。多分、私の思い描いていた理想は、信仰を持ち、この世的にも幸せな人生を送るというものだったと思います。子供たちも高校生の頃からは、今までのように親について来てくれるというわけではなくなりました。それまで、子供はつい

て来るものと思っていたのです。集会に来ていれば安心していましたし、救いも自動的になるような漠然とした思いでした。急に子供の魂の救いを求め始め、信仰書を沢山読んだりもしました。その中に、子供に教えるべきは、朝晩、聖書物語を読むとか、祈るとか、人道的な良いこと、ではなくて、神様を畏れることであること、そしてそれこそがクリスチャンファミリーの教育だとあって、本当にその通りだと目からうろこの落ちる思いでした。今さらながら、どうしたら神様を畏れるように育てられるのかと思い悩みました。どう考えても、自分が神様を心から畏れていなくては出来ない話です。自分は神様を畏れているのだろうか、もちろん畏れてはいると思う、しかし、他のことも同じ位おそれているのかも知れない。神様を畏れる、そのことこそ、口で教えることなど出来ないのだろうな…と思い浮かんでは、その思いもだんだんぼやけていってしまい、そうしているうちに子育ても終わってしまいました。

ごく最近、私の中でその「出来ない」が再び出て来ました。あるキャンプで、大学生のお子さんを持つ若い姉妹と会話をしていた時です。子供の教育の話をしていました。お互いに出来ない、出来ないという話をしていた時です。どういうわけか、ある思いが突然ストンと心に落ちました。私が子供にとって何の手本にもならなかったことも含めて、私には出来ない、人間には出来ないことなのだということです。その時に、魂の救いは人間には出来ないのだという当たり前のことがはっきりわかりました。唯一出来ることはイエス様に聞き、頼ることしかありません。それで、いつもベックさんは「祈るしかないよ」と言っておられたのか、と改めて思いました。

…「あなたはアラムの王に拠り頼み、あなたの神、主に拠り頼みませんでした。…主はその御目をもって、

あまねく全地を見渡し、その心がご自分と全く一つになっている人々に御力をあらわしてくださるのです。あなたは、このことについて愚かなことをしました。今から、あなたは数々の戦いに巻き込まれます。」

（2歴代誌　16・7、9）

このことが三十年前にわかっていたらと思いますが、ベックさんの「遅すぎるということはないよ」ということばもまた真実とわかって慰めです。聖書のことばは私の三十年を愚かと一言で言っています。私自身が愚かな者ということです。イエス様の前に心から悔い改めて助けて頂くしかないと思います。

両親の救いのことを少しお話します。二〇一四年に相次いで天に召されました。その葬儀を機に、父のいとこと話す機会があり、父の叔母が松山の地でクリスチャンであったことを詳しく聞くことが出来ました。私たち家族の救いには、遠い親戚の祈りがはるか昔にあったのです。

両親の救いのきっかけは、一九九六年に父がドイツキャンプに参加したことでした。当時七十才でした。父は信仰を求めるというわけではなく、ただ娘夫婦や孫と一緒にドイツを旅行したかったのだと思います。正直に言うと、未信者の父と一緒に行くことは面倒な気がしていました。「タバコもお酒もないけど大丈夫？」と聞くと、それでもいいから行きたいと言うのです。結果として、父は救われました。キャンプ中のある夜、まだイエス様を信じていない方々のために、ベックさんが聖書のことや人間の罪、イエス様の救いなどの信仰の話をわかりやすく話してくださる機会がありました。その翌朝のことです。宿舎の周りを父と一緒に散歩していると父がうれしそうに話し始めたのです。「信仰というのは、自分のわがままを認めて、イエス様にごめんなさい、ありがとう、今からのことをよろしくという思いを持つだけなんだな」と。本当

に嬉しそうでした。それまで私にとって父は短気で理屈屋でとっつきにくい存在だったのですが、その時から幼子のような単純さが出てきて、近づきやすくなりました。母はそんな父に対して、長年の夫婦生活の軋轢を、妻としてはそう簡単には許せないと受け入れ難かったようですが、二人で礼拝に出かけるようになり、一九九八年に一緒に受洗しました。母が友の会に求めたより良い人生が、このような形でやって来るとは想像しなかったのではと思います。

二〇一六年、広島へ夫婦で導かれ過ごしたことを少しお話ししたいと思います。次女は結婚してもう巣立っています。この家族の救いを祈っています。長女は短大を卒業して就職した後、仕事の重圧で鬱になり、その仕事を辞めました。しばらくして復帰できるようになり近所で働いています。長女は思春期の頃にも反発することなく私たちと一緒に礼拝には来続けていました。しかし、個人的にイエス様と出会ったのは、その鬱のどん底だったようです。そこで救われました。当時、満員電車での通勤は息苦しくパニックになってしまい、それ以降、都内へのラッシュの電車の通勤はしたくないと言って、自転車で行ける所へ通っています。私は娘のそのような様子を見ていて、この子はこの東京のごちゃごちゃではなくて、地方の静かな所で暮らした方が合っているのかな…と思っていました。二〇一四年に両親を天に見送ってからは、（主人の両親もすでにイエス様を受け入れ天に召されています）「イエス様、もし地方に暮らした方が良いのなら、自分では判断出来ませんから、主人に仕事と住む家を与えて導いてください」と祈っていました。

そのような折、二〇一五年の秋に、当時六十五歳で退職して家にいた主人に広島のある会社から電話がかかってきました。どうしても人がいないので、一年間で良いので来てもらえないか？というものでした。住まいも用意してくださるというのです。主人はどうし

てこんな突拍子もない話が来たのだろう、と訝しげでしたが、もしかしたらそれはこういう事かも知れないと私の祈りのことを話しました。それを聞いた主人が、それは祈りの答えだろうということになり、お受けすることになりました。心弾ませて娘にその話をすると、あっさりと「自分は今仕事を辞めて行くことは出来ないから、二人で行って来たら?」と言われてしまいました。それでは離れて暮らしてみるのも経験かもしれないと、夫婦二人で出かけました。二〇一六年の正月明けから、最年長の新入社員として赴任しました。定年後の仕事だからと安易にイメージしていたのですが、こんな遠くから雇わなくてはならないぐらい忙しいというのが実情でした。主人は、初日から毎夜十二時過ぎの帰宅となりました。主が導かれた事だから何があっても心配は要らないと思ってはいましたが、果たして勤まるのだろうかと不安になりました。やはり無理でしたと帰る訳にはいきませんから、ここは一致団結して何としてもやり抜くしかないと無言のうちに二人で決意しました。働くのは主人ですから、私は祈ることと、聖書の箴言にあるように、夫に良いことをし、悪いことをしない、を実行することだけでした。長いサラリーマン生活の間中、私は文句ばかり言ってきたのですが、最後の一年間、文句を言わず、悪いことをせずに過ごせて締めくくれたことが感謝でした。広島は二度目です。会社は違いますが、一九九九年から主人は単身赴任も含めて八年間。私たち家族は四年間過ごしました。集会の兄弟姉妹に再び受け入れて頂いて、共に過ごせたことも本当に喜びでした。二十人ほどの礼拝ですが、ちょうど親戚の集まりのようです。姉妹たちで集まって祈り会も持たれ、毎週一針一針縫うような祈りに、一つ一つ答えられて行くことが喜びでした。広島の市内は緑と川の流れのある本当に美しい景観です。その自然にも心癒されて離れがたい思いでした。この一年四か月は目に見える、感じられる祝福の

時だったのですが、きっと、目に見えないことはこれからわかるのだろうと思います。娘も自分なりのペースで一人で暮らしてみて良かったのだと思います。現在は、また三人で暮らしています。

私は、人間には出来ないと思うようになってから、やっと人ではなくイエス様に目が向くようになったと思います。がんばることが好きな私は、以前は娘に対しても、信仰にもっと熱心になったら良いのに…と思う事がたびたびでした。しかし、それは私の肉の熱心です。自分でどうにも出来ないどん底でイエス様と出会っている娘は、とっくにイエス様だけに頼る信仰に進んでいたのだと思います。広島集会でも自分のことや家族のことを、たくさん祈って頂きました。そして、また春日部集会に戻ってからも兄弟姉妹と共に祈り、歩める毎日に感謝です。

わがたましいよ。主をほめたたえよ。私のうちにあるすべてのものよ。聖なる御名をほめたたえよ。わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてくだったことを何一つ忘れるな。

（詩篇　103・1～2）

芳我雅子（はが　まさこ）
埼玉県草加市立北谷小学校、草加市立栄中学校、埼玉県立春日部女子高校、立教大学社会学部卒、大和銀行（現 りそな銀行）、結婚後主婦
夫　幸雄（ゆきお）
長女　智子（ともこ）
次女　黒川郁子（いくこ）家族

キリスト集会へのご案内

牧師制度がありません

キリスト集会には牧師制度はありません。
いろいろな職業のかたが自発的に責任を分かちあい、いっさいの強制はなく、
純粋に聖書のみことばのみに立ち、主だけを中心とする交わりを大切にするひとびとの集いです。

組織も、会則もありません

キリスト集会には役員会も、総会も、定例会儀も、会則もありません。
みなが助けあって重荷を分かちあい、すべてが自発的によろこびをもってなされます。

会員制度がありません

会員として登録されるような、いわゆる会員名簿にあたるものはありません。
出入りは自由であり、宗教団体的な制度はいっさい排除して、
主ご自身のみを頭とし、主ご自身のみが満ち満ちておられることを祈り求めている集会です。

献金制度がありません

月定献金、年定献金などの献金制度はなく、すべての献金は自発的に行われ、
無記名ですからだれがいくらささげたかは主のみがごぞんじです。

日曜礼拝

祈りと賛美がつぎつぎにささげられ、主の十字架のあがないの血潮を覚え、
パンとぶどう液にあずかります。
あらかじめ決められたプログラムはなく、主に示されるままに各人が祈り、賛美します。
礼拝の後は福音集会で、兄弟によって主のみことばがとりつがれます。

家庭集会

家庭で開かれる集会で、兄弟によるメッセージ、兄弟姉妹による証しがあり、
福音の喜びをつたえる集いです。世界で百カ所以上あり、多くのところで日曜礼拝が行われます。

よろこびの集い

西軽井沢国際福音センターはじめ世界各地で開かれ、全国の人々が集まる大きな集会です。
快適で経済的な宿泊施設を利用し、ほとんど毎週どこかで開かれます。

吉祥寺キリスト集会

東京都武蔵野市吉祥寺本町4−9−11
[電話] 0422-21-8450（集会所）

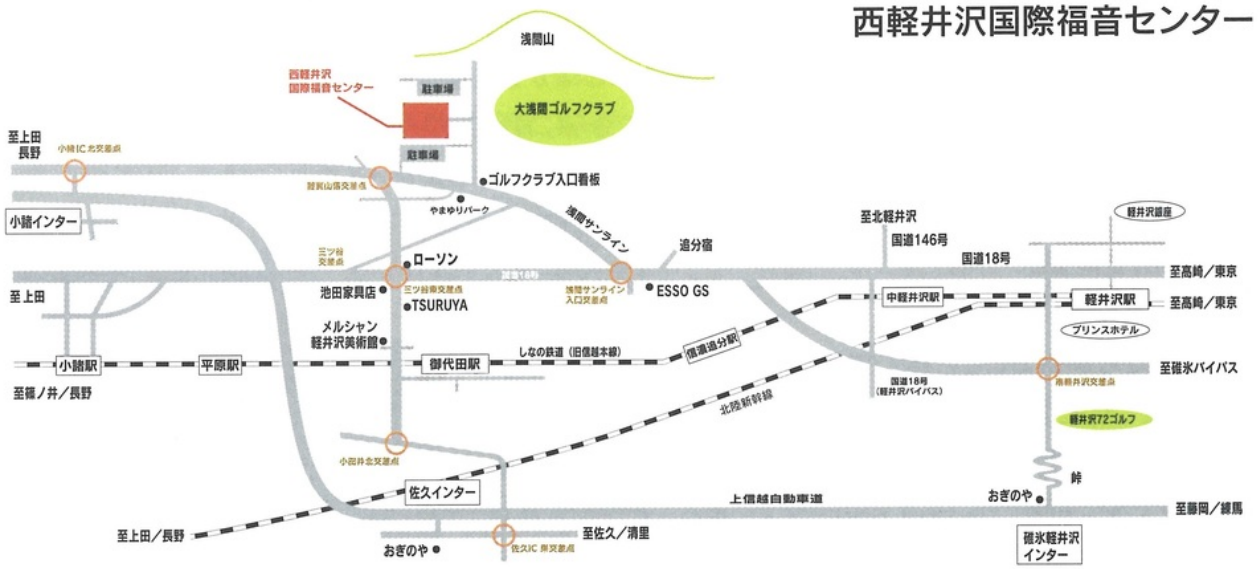
日曜礼拝・福音集会

10:30 / 18:30

火曜学び会	11:00
木曜祈り会	19:00
子供日曜学校	9:30
中高生日曜クラス	9:30



西軽井沢国際福音センター



西軽井沢国際福音センター
[電話]　0267−32−6400
長野県北佐久郡御代田町塩野450−15　〒389−0201

西軽井沢国際福音センター・ゲストハウス
[電話]　0267−32−6444
長野県北佐久郡御代田町塩野450−33　〒389−0201

■しなの鉄道で御代田駅下車。タクシーで約5分（1000円程度）徒歩45分＝3km
御代田へは東京駅より北陸新幹線にて軽井沢駅下車、しなの鉄道に乗り換えて三つ目の御代田駅下車。
■ 周辺の道路に車を駐車させることは禁止されていますので、厳重にお守りください。

実を結ぶ命 がんにうち勝ったドイツ少女リンデ



ゴットホルド・ベック編著

二十歳そこそこのドイツ少女リンデが、がんであることを知りながら、自分の死をかくも冷静に受け入れることができ、すべてを感謝し、自分の思いは少しも求めずに、喜びつつ召されていったというこの事実は、現代の奇蹟であり、神の実在を証しする一つの大きな証拠です。

「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した」(エレミヤ31・3)リンデの、主に従い通す態度は、キリスト集会の中に生き生きとしたリバイバルの波を起こし、多くの人々が自分の支配権をイエス様に明け渡し、そしてただ神のみことばにのみ拠り頼む者へと変えられています。なおこの本は韓国語版、ドイツ語版、英語版が出版されました。

なにものも私たちを神の愛から引き離すことはできない(上・下巻)



ゴットホルド・ベック著

吉祥寺キリスト集会でのベックさんの聖書の学びのうち、「ローマ人への手紙」1章から8章までを上巻に、9章から16章までを下巻にまとめたものです。聖書に初めて接する方、信仰の歩みを始めた方のために分かりやすく書かれていて、全体は第1章から順を追って学ばれていますが、一つ一つのメッセージが深い霊的な内容を持ち独立しているため、どこから読み始めても、豊かな恵みが私たちの心に注がれます。私たちが神様のみことばに目覚め、救われるためには、たった一つの聖句でも十分でした。しかし、さらに成長していくためには、多くのみことばが、聖書全体が必要です。この本は、聖書を「研究」するためではなく、日々の生活においてさらに深く主のみことばを味わいたいと願っておられる方々のために、すばらしい励ましとなると信じております。

絶えず祈れ(上・下巻)



ゴットホルド・ベック著

主は私たちが祈ることを望んでおられます。主なる神は、あふれるばかりの祝福を、私たちに注ごうとしておられるからです。祈りこそ神の富のための鍵なのです。そして信仰は、祝福が私たちのうえに注がれる扉を開けるのです。祈りの本当の大切さをよく知ることができれば、まだ救われていない方々はイエス様のみもとに導かれ、また、すでに救われている方々は、いまよりもさらに何倍もイエス様に祈るようになるにちがいありません。そして、私たちが主に祈るための励ましとなるのが、この「絶えず祈れ」の上巻であり、下巻です。「絶えず祈れ」、「まことの祈り」、「祈りへのまねき」、「真剣な祈り」、「祭司としての奉仕」、「イエスのみ名によって祈る」、「祈りのかぎりない可能性」などのメッセージが収められています。

■ キリスト集会の本、雑誌などの注文はハガキで下記迄。電話での注文は、お控えください。

注文先　〒180−0004　東京都武蔵野市吉祥寺本町　4−9−11　吉祥寺キリスト集会

集会の出版物



モーセの十戒　神の聖なる戒め

ゴットホルド・ベック著

モーセの十戒は約三千五百年前、主がモーセを通してイスラエルの民に告げられた「十の戒め」です。そこには「聖なる神のみこころ」が現されています。ですから、当時のイスラエル人だけでなく、あらゆる時代の、すべての人間に対する訓戒と言うことができます。そして、この戒めを真剣に受け止めるとき、人間は自分の罪深さを思い知らされ、罪の問題の解決を願ってイエス様による救いに導かれる、という恵みに与ることができます。ところが、この大切な「聖なる戒め」が、今はほとんど無視され、軽んじられています。それは近年の社会秩序の乱れとも無縁ではないでしょう。こういう時代であるからこそ、「十戒のメッセージ」に心の目を向ける必要がある、と思います。キリスト集会の雑誌「主は生きておられる」が創刊号から12回にわたって「モーセの十戒」を連載し、それを単行本にまとめた理由もここにあります。



すぐに起こるはずのこと―ヨハネの黙示録（第1～4巻）

ゴットホルド・ベック著

ヨハネの黙示録は、初代教会で何よりも大切にされました。しかし、黙示録の内容と文章は、現代の私たちには難解なところがあり、誤読も多く、霊的に正しく読み解くことは困難になっています。しかし、この黙示録の中にこそ、末の世にある私たちにとって、何よりも必要なことが示されているのです。私たちはこの黙示録に、もっと注意を向け、深く深く読みこむべきではないでしょうか。この本は、吉祥寺キリスト集会の学び会で、約1年半ほどの間に行われたベックさんのメッセージをまとめたもので、第1巻には黙示録の1～3章、第2巻には4～7章、第3巻には8～15章、第4巻には16～終章までが、それぞれ収められています。



光よあれ ―私たちは主のもの

証しシリーズ（第1～9集）

いかにしてイエス様に出会い、救われたか、またそれによって、人生がどのように変わり、重荷から解放され、よろこびと平安の日々を生きることができるようになったかを、多くの方々が証しされています。第1集から第9集まであり、実に596人の方々がそれぞれの人生と主にあるよろこびを感動的に語っておられます。

Unser HERR lebt
主は生きておられる

主は生きておられる　第50号

定価100円（税込み）2019年３月15日初版

編集スタッフ	岩本秀造　石塚稔成　石塚優子　黒澤錬二 鈴木力　芳我幸雄　福留伸子　牧野正士
印刷・制作	新生宣教団
題字デザイン	飯守恪太郎
発行所	キリスト集会
サイトマップ（キリスト集会のご案内）	http://christ-shukai.net/

今回も多くの方々から写真の提供をいただきました。
勝手ながらお名前は省かせていただきます。
ご協力ありがとうございました。


主は、生きておられる
Unser HERR lebt

Unser HERR lebt

主は、生きておられる

まことに、まことに、あなたに告げます。
人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。（ヨハネ3・3）

vol.50 定価100円（税込み）